# 松波むかし語り　ここに住み続けて　その 15

今回のお客様

## 創成期の町会を支えて

## 齊藤　春午さん　91 歳　4 丁目

***“ごみ処理、汲み取り、下水……、せっぱ詰まった課題はそこら中にありました！”***

―交渉ごとがお得意なのは、仕事で培った経験が生きたということなのでしょうか？

「松波町会は、初代会長になった藤木与吉さん宅の八畳間から始まったんですよ」。まだ町会事務所のなかった時分の話です。そんな町会の創成期、この地域で切実な問題といえばごみとし尿処理でした。「木工所を経営していた浦山さんが環境部長で私が副部長の時、ごみの苦情が多いので市の清掃課にかけあったり、トイレの汲み取りに困るといっては、業者と交渉し定額の切符制にして各家庭に配ったりしました」。

一番の大仕事は下水道の設置だったといいます。「台所排水の流す先がなく、暗くなるとひしゃくで道路に撒いたりして困っていました」。翌、昭和 32 年、環境部長になった齋藤さんは、下水道課と交渉、下水が引かれることにはなったのですが、市下水道条例には「坪 100 円也」の各戸負担金が記されていました。下水の説明会を各所で開き、町内有志を募って『賛成書』にハンコをもらい、集金して歩きました。「１軒でも反対されると下水はつながらなかったからねえ」。しかし齋藤さんたちの苦労が実り、『集金簿』と集めた現金を持って市役所へ行き、無事いまのような下水が完成したのでした。

もう一つ、齋藤さんの大仕事がありました。建て替えられその姿は写真でしか見られませんが、初代の町会事務所の建設です。当時、市の花嫁学校が取り壊され廃材になっていたことから、無償で払い下げを受け、昭和 34 年、現在地に町会事務所が建ったのでした。

なぜ齋藤さんが“交渉係”を務めるようになったのか？　それは齋藤さんのお仕事と関係があるようです。齋藤さんは大正８年、県内山武郡日向村（現山武市）に生まれ、昭和 15 年、県庁に入り、経済部でみそ・しょう油・油などの配給統制業務に携わっていました。兵隊に召集され 20 年８月６日の夜、原爆投下直後の広島の街に入って被爆しました。そのため、現在も「原爆被爆者の会」の運動に熱心に加わっています。戦後、県庁から政府へと転勤、物価統制の仕事をし、その後、長く東京都の主税局に勤めました。「合わせて 35 年、有楽町に通ったことになります」。ときには職場で回覧板を書き、それを区長さんに届けたこともあったといいますが、こうしたお仕事が、町会活動にも幸いしたのでは……。

奥様の礼子さんも、町会副会長や、40 歳から 71 歳まで長く民生委員を務め、ご夫婦で地域に尽力してきました。モットーは「いたわりと思いやり」「愛と誠」とうかがいました。

昭和 40 年の「長瀞ハイキング旅行会」。懐かしいお顔もたくさん見えます（斎藤さん撮影）。